



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

年間第3主日 A年 (2023年1月22日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：イザヤ書 8章23b節—9章3節

第二朗読：コリントの信徒への手紙一 1章10—13、17節

福音朗読：マタイによる福音書 4章12—23節

まなざし

シリア・エフライム戦争

今日の第一朗読を読むにあたっては、シリア・エフライム戦争（紀元前733年、あるいは734年）について知っておいたほうがよいでしょう。シリアとエフライム（北のイスラエル王国の別称）の戦争のことではありません。シリアとエフライムが同盟を結んで、ユダ王国に侵攻した戦争のことです。

紀元前8世紀、中東の覇者であるアッシリアの脅威に悩まされていた北のイスラエル王国の王ペカは、シリア、すなわちダマスコ（アラム）の王レツィンと同盟を結びます。アッシリアに対する同盟です。そして南のユダ王国のアハズにも同盟に加わるようにと誘います。しかし、アハズはその申し出を拒否しました。そこで、シリアとエフライム（イスラエル）の連合軍はユダ王国に侵攻します。ユダ王国を従属させ、王をすげ替えて、自分たちの傀儡国家を作るためでした（イザヤ7章6節参照）。エルサレムは包囲され、アハズは最大のピンチに直面します。

その時、預言者イザヤはアハズに会い、神のことばを伝えます。それはペカとレツィンが滅ぼされるという内容でした（イザヤ7章7-9節参照）。だから、アッシリアに頼って彼らと闘ってはならないと、イザヤはアハズに忠告します（7章10-17節）。しかし、アハズは結果的にアッシリアの王に援助を求めます。当時、アッシリアはエジプト支配を目論んで、南へと支配の領域を拡大しつつありました。アッシリアの王、ティグラト・ピレセル三世はダマスコを征服し、さらにはイスラエルを攻撃し、イスラエルの領土の大半を奪ってしまいます（紀元前732年）。それが、偶像礼拝を奨励し、神のことばに従わなかったアハズ王にもたらされた結末でした。

今日の第一朗読を含む『イザヤ書』6章1節から9章6節は前述のシリア・エフライム戦争

の前後に預言者イザヤが語ったことばです。通称『イザヤの回顧録』と呼ばれています。8章23b節から9章6節はアッシリアによってイスラエル王国の領土が奪われた時に預言者イザヤが語ったことばです。

今日の朗読箇所は、クリスマスに読まれる箇所と重複します。徹底的に破壊し尽くされた町に立って、イザヤはいつか「深い喜びと大きな楽しみ」(2節)が来ると語ります。それはかつてのメディアンの勝利の日のように決定的な救いの到来だと語ります。しかし、その救いの到来はひとりのみどりご……ひとりの男の子」(5節)によってもたらされるのです。

第二朗読で、13節以降パウロは問いかけます。第一の問いかけは「キリストは幾つにも分けられてしまったのですか?」です。第二の問いかけは「十字架に架けられたのは誰ですか?」です。そして最後の問いかけは「誰の名で洗礼を受けたのですか?」です。洗礼は「キリストのものとなるために」授けられたのです。洗礼はキリストにおける一致をもたらすはずなのに、洗礼を授けた人との親しさに惹かれているコリントの教会をパウロは批判しています。17節からパウロの並々ならぬ覚悟がうかがえます。パウロの使命は福音を伝えることにありました。福音とは、イエスキリストそのものです。同時に福音は「神のことば」です。パウロは「神のことば」を伝えるのです。

預言者イザヤが伝える神のことばは、救済のことばでもありました。そのことばがイエスさまによって実現したとするのが今日の福音の箇所です。そして、イエスさまは「悔い改めよ。天の国は近づいた」と短いことばで救いを告げます。同じようにイエスさまは漁師たちを「御覧になって」、ことばをかけて、従わせるのです。イエスさまの宣教は、眼差しとことばによるのです。

説教：まなざし

マスクが幅を利かせ、マスク越しに人と人と向き合います。それが今の日本です。ですがもともと日本人は、まなざしを注ぐのが下手です。まなざしを交差させて、相手と対話することは滅多にありません。顔を下に向けるのは上手かもしれません。しかもスマホ生活ですから、首を上にあげることは日常の生活でずいぶんとなくなりました。おかげでわたしもストレートネックです。

イエスさまはまなざしを注ぎます。「見て」、「御覧になって」。イエスさまのまなざしとは、どんなまなざしだったのでしょうか。そのまなざしを受けたペトロたちは何を感じたのでしょうか。黙想のテーマとなります。